

雪靈續記

泉鏡花作

—

機會がおのづから來ました。

今度の旅は、一體はじめは、仲仙道線で故郷へ着いて、其處で、一事を済したあとを、姫路行の汽車で東京へ歸らうとしたのであります。——此列車は、米原で一體分身して、分れて東西へ馳ります。

其が大雪のために進行が續けられなくなつて、晩方武生驛（越前）へ留つたのです。強ひて一町場ぐらゐは前進出來ない事はないが、然うすると、深山の小驛ですから、旅舎にも食料にも、乗客に對する設備が不足で、危険であるからとの事でありました。

元來——歸途に此の線をたよつて東海道へ大廻りをしようとしたのは、實は途中で決心が出來たら、武生へ降りて許されない事ながら、そこから

虎杖の里に、もとの蔦屋（旅館）のお米さんを訪ねようと言ふ。見る／＼積る雪の中に、淡雪の消えるやうな、あだなのぞみがあつたのです。で其の望を煽るために、最う福井あたりから酒さへ飲んだのでありますが、酔ひもしなければ、心も定らないのであります。

唯一夜、徒らに、思出の武生の町に宿つても構はない。が、宿りつゝ、其處に虎杖の里を彼方に視て、心も足も運べない時の儂さには尚ほ堪へられまい、と思ひなやんで居ますうちに――
汽車は着きました。

目をつむつて、耳を壓へて、發車を待つのが、三分、五分、十分、十分十五分――やゝ三十分過ぎて、やがて、驛員に其の不通の通達を聞いた時は！

雪が其まゝの待女郎に成つて、手を取つて導くやうで、まんじ巴の中空を渡る橋は、宛然に玉の棧橋かと思はれました。

人間は増長します。――積雪のために汽車が留
つて難儀をると言へば――旅籠は取らないで、
すぐにお米さんの許へ、然うだ、行つて行けなさう
な事はない、が、しかしと、そんな事を思つ
て、早や壁も天井も雪の空のやうに成つた停車場に、
しばらく考へて居ましたが、餘り不寐だと己を制し
て、矢張り一旦は宿に着く事にしましたのです。で
すから、同列車の乗客の中で、停車場を離れました
のは、多分私が一番あとだつたらうと思ひます。
大雪です。

「雪やこんこ、

霰やこんこ。」

大雪です。――が、停車場前の茶店では、まだ
小兒たちの、そんな聲が聞えて居ました。其の時分
は、山の根笹を吹くやうに、風もさら／＼と鳴りま
したつけ。町へ入るまでに日もとつぷりと暮果てま
すと、

「爺さいのウ婆さいのウ、

綿雪小雪が降るわいのウ、

雨戸も小窓もしめさつし。」

と寂しい佗しい唄の聲――雪も、小兒が爺婆に化

けました。――風も次第に、ぐわう／＼と樹ながら
山を揺りました。

店屋さへ最う戸が閉る。旅籠屋も門を閉しまし
た。

家名も何も構はず、いま其家も閉めようとする一
軒の旅籠屋へ駈込みましたのですから、場所は町の
目貫の向へは遠いけれど、鎮守の方へは近かつたの
です。

座敷は二階で、だゞつ廣い、人氣の少ないさみし
い家で、夕餉もさびしうございました。

若狭鰯――大すきですが、其が附木のやうに凍つ
て居ます――白子魚乾、切干大根の酢、椀はまた白
子魚乾に、とろゝ昆布の吸もの――しかし、何とな
く可懐くつて涙ぐまるゝやうでした、何故ですか。

酒も呼んだが酔ひません。むかしの事を考へると、
病苦を救はれたお米さんに對して、生意氣らしく恥

かしい。

両手^{りやうて}を炬燵^{こたつ}にさして、俯向^{うつむ}いて居^ゐました、濡^ぬれるやうに涙^{なみだ}が^で出^でます。

さつと言^いふ吹雪^{ふぶき}であります。さつと吹^ふくあとを、ぐわうーと鳴^なる。次第^{しだい}に家^{いへ}ごと揺^ゆるほどに成^なりましたのに、何^{なん}と言^いふ寂寞^{さびしき}だが、あの、ひつそりと障子^{しやうじ}の鳴^なる音^{おと}。カタ／＼カタ、白^{しろ}い魔^まが忍^{しの}んで來^くる、雪入道^{ゆきにふだう}が透^す見^みする。カタ／＼／＼カタ、さーツ、さーツ、ぐわう／＼と吹^ふくなかにー見^みる／＼うち障子^{しやうじ}の棧^{さん}が。パツ／＼と白^{しろ}く成^なります、兩戸^{あまど}の隙^{すき}へ鳥^{とり}の嘴^{くちばし}程^{ほど}吹^ふ込^こむ雪^{ゆき}です。

「大雪^{おほゆき}の降^ふる夜^よなど、町^{まち}の路^{みち}が絶^たえますと、三日^かも四日^かも私^{わたし}一人^{ひとり}ー」

三年^{ねんいぜん}以前^{いぜん}に逢^あつた時^{とき}、お米^{よね}さんが言^いつたのです。

「路の絶える。大雪の夜。」

お米さんが、あの虎杖の里の、此の吹雪に

「唯一人。」

私は決然として、身ごしらへをしたのであります。

「電報を――」

と言つて、旅宿を出ました。

實はなくなりました父が、其の危篤の時、東京から歸りますのに、（タダイマココマデキマシタ）と此の町から発信した 偶とそれを口實に――時間は遅くはありませんが、目口もあかない、此の吹雪に、何と言つて外へ出ようと、放火が強盗、人殺に疑はれはしまいかと危むまでに、さんざん思ひ惑つたあとです。

ころ柿のやうな髪を結つた霜げた女中が、雑炊でもするのでせう――土間で大釜の下を焚いて居ました。番頭は帳場に青い顔をして居ました。が、無論、自分たちが其の使に出ようとは怪我にも言はないのであります。

「何う成るのだらう とにかくこれは尋常事ぢ

やない。」

私は幾度となく雪に轉び、風に倒れながら思つたのであります。

「天狗の為す業だ、――魔の業だ。」

何しろ可恐い大な手が、白い指紋の大渦を巻いて居るのだと思ひました。

いのちとりの吹雪の中に――

最後に倒れたのは一つの雪の丘です。――然うは言つても、小高い場所に雪が積つたものではありません、粉雪の吹溜りがこんもりと積つたのを、哄と吹く風が根こそぎに其の吹く方へ吹飛ばして運ぶのであります。一つ二つの數ではない。波の重るやうな、幾つも幾つも、颯と吹いて、むら／＼と位置を亂して、八方へ高く成ります。

私は最う、それまでに、幾度も其の渦にくる／＼と巻かれて、大な水の輪に、子子蟲が引くりかへる

やうな形で、取つては投げられ、掴んでは倒され、捲き上げては倒されました。

私は　　―　　白晝、北海の荒波の上で起る處の此の吹雪の渦を見た事があります。―　　一度は、たとへば、敦賀灣でありました―　　繪にかいた雨龍のぐる／＼と輪を巻いて、一條、ゆつたりと尾を下に垂れたやうな形のものが、降りしきり、吹煽つて空中に薄黒い列を造ります。

見て居るうちに、其の一つが、ぱつと消えるかと思ふと、忽ち、ぼつと、續いて同じ形が顯れます。消えるのではない、幽に見える若狭の岬へ矢の如く白く成つて飛ぶのです。一つ一つが皆自然うでした。―　　吹雪の渦は湧いては飛び、湧いては飛びます。

私の耳を打ち、鼻を揞ぢつゝ、いま、其の渦が乗つては飛び、掠めては走るんです。

大波に漂ふ小舟は、宙天に揺上らるゝ時は、唯波

ばかり、白き黒き雲の一片をも見ず、奈落に揉落さるゝ時は、海底の巖の根なる藻の、紅き碧きをさへ見ると言ひます。

風の一息死ぬ、眞空の一瞬時には、町も、屋根も、軒下の流も、其の屋根を壓して果しなく十重二十重に高く聳ち、遙に連る雪の山脈も、旅籠の炬燵も、釜も、釜の下なる火も、果て虎杖の家、お米さんの薄色の袖、紫陽花、紫の花も お米さんの素足さへ、きつぱりと見えました。が、脈を打つて吹雪が来ると、呼吸は咽んで、目は盲のやうに成るのでありました。

最早、最後かと思ふ時に、鎮守の社が目の前にあることに心着いたのであります。同時に峰の尖つたやうな眞白な杉の大木を見ました。

雪難之碑のある處

天狗一魔の手など意識しましたのは、其の樹のせみかも知れませんが。たゞし此に目標が出来たゝめか、背に根が生えたやうに成つて、倒れて居る雪の

丘の飛移るやうな思ひはなくなりました。

洵は、兩側にまだ家のありました頃は、――中に
旅籠も交つて居ます――一面識はなくなつても、同
じ汽車に乗つた人たちが、疎にも、それ／＼の二階
に籠つて居るらしい、其れこそ親友が附添つて居る
やうに、氣丈夫に頼母しかつたのであります。尤も
其を心あてに、頼む。――助けて――助けて――と
幾度か呼びました。けれども、窓一つ、ちらりと燈
火の影の漏れて答ふる光もありませんでした。聞え
る筈もありますまい。

いまは、唯お米さんと、間に千尺の雪を隔つるの
みで、一人死を待つ、寧ろ目を瞑るばかりに
成りました。

時に不思議なものを見ました――底なき雪の
大空の、尚ほ其の上を、プスリと鑿で穿つて其の穴
から落ちこぼれる。大きさは然うです。蝻
燭の灯の少し大いほどな眞蒼な光が、ちら／＼と雪
を染め、染めて、ちら／＼と染めながら、ツツと輝

いて、其の古杉の梢に来て留りました。其の青い火は、しかし私の魂が最う藻脱けて、虚空へ飛んで、倒に下の亡骸を覗いたのかも知れませんが。

が、其の影が映すと、半ば埋れた私の身体は、ばつと紫陽花に包まれたやうに、青く、藍に、群青に成りました。

此の山の上なる峠の茶屋を思ひ出す。――極暑、病氣のため、俣で越えて、故郷へ歸る道すがら、其の茶屋で休んだ時の事です。門も背戸も紫陽花で包まれて居ました。――私の顔の色も同じだったらうと思ふ、手も青い。

何より、嫌な、可恐い雷が鳴つたのです。たゞさへ破れようとする心臓に、動悸は、破障子の煽るやうで、震へる手に飲む水の、水より前に無数の蚊が、目、口、鼻へ飛込んだのであります。

其の時の苦しさ。――今も。

白い梢の青い火は、また中空の渦を映し出すー
 とぐるを巻き、尾を垂れて、海原のそれと同じです。
 いや、それよりも、峠で屋根に近かった、あの可恐
 い雲の峰に宛然であります。

此の上、雷。

大雷は雪國の、こんな時に起ります。

死力を籠めて、起上らうとすると、其の渦が、風
 で、ぐわうと巻いて、捲きながら亂るゝと見れば、
 計知られ高さから颯と大瀧を揺落すやうに、泡沫と
 も、しぶきとも、粉とも、灰とも、針とも分かず、
 降埋める。

「あつ。」

私は又倒れました。

怪火に映る、其の大瀧の雪は、目の前なる、ツツ
 ンと重い、大な山の頂から一雪崩れに落ちて来るや
 うにも見えませんでした。

引挫がれた。

苦痛の顔の、醜さを隠さうと、裏も表も同じ雪の、厚く、重い、外套の袖を被ると、また青い火の影に、紫陽花の花に包まれますやうで、且つ白羽二重の裏に薄萌葱がすつと透るやうでした。

ウオ、、、、！

俄然として耳を噛んだのは、凄く可恐い、且つ力ある犬の聲でありました。

ウオ、、、、！

虎の嘯くとよりは、龍の吟ずるが如き、凄烈悲壮な聲であります。

ウオ、、、、！

三聲を續けて鳴いたと思ふと 雪をかついだ、
太く逞しい、しかし瘦せた、一頭の和犬、むく犬の、
耳の青竹をそいだやうに立つたのが、吹雪の瀧を、
上の峰から、一直線に飛下りた如く思はれます。忽ち私の傍を近々と横ぎつて、左右に雪の白泡を、ざつと蹴立て、恰も水雷艇の荒浪を切るが如く猛然として進みます。

あと、ものゝ一町ばかりは、眞白な一條の路が開けました。――雪の渦が十ヲばかりぐる／＼と續いて行く。

此を反對にすると、虎杖の方へ行くのであります。犬の其の進む方は、まるで違つた道でありました。が、私は夢中で、其のあとに續いたのであります。

路は一面、渺々と白い野原に成りました。

が、大犬の勢は衰へません。――勿論、行くあとに／＼道が開けます。渦が續いて行く野の中空を、雪の翼を縫つて、あの青い火が、蛭々と螢のやうに飛んで來ました。

眞正面に、凹字形の大な建ものが、眞白な大軍艦のやうに朦朧として顯れました。と見ると、怪し火は、何と、ツツツと尾を曳きつゝ。先へ斜に飛んで、其の大屋根の高い棟なる避雷針の尖端に、ばつと留つて、ちら／＼と青く輝きます。

ウオ／＼、

鐵てつづくりの門もんの柱はしらの、やがて平地へいちと同じおなじに埋うづまつた眞中まんなかを、犬いぬは山やまを乗のるやうに入はいります。私わたしは坂さかを越こすやうに續つゞきました。

ドンと鳴なつて、犬いぬの頭づつ突つきに、扉とびらが開あいた。

餘あまりの嬉うれしさに、雪ゆきに一度ど手を支つかへて、鎮守ちんじゆの方ほうを遙えう拝はいしつゝ、建たてものゝ、戸とを入はいりました。

學校がくかう　　――　　中學校ちうがくかうです。

唯たゞ、犬いぬは廊下らうかを、何處どこへ行いつたか分わかりません。

途端とたんに　　・

ざつ／＼と、あの續つゞいた渦うづが、一ひとツづゝ數萬すうまんの蛾がの群むらつたやうな、一人ひとの人の形かたちになつて、縱隊じゅうたい一列れつに入はいつて來きました。雪ゆきで束つかねたやうですが、いづれも演習行軍えんしふかうぐんの装おそほひして、眞先まつききなのは刀たうを取とつて、びたりと胸むねにあてゝ居ゐる。それが長靴ながくつを高たかく踏ふんでづかりと入はいる。あとから、背囊はいなう、荷銃になひづしたのを、一隊たい十人にんまで數かずへました。

うろつく者ものには、傍目わきめも觸ふらず、肅然しゆくぜんとして廊下らうかを長ながく打うつて、通とほつて、廣ひろい講堂かうだうが、青白あをじろく映うつつて

開く、其處へ堂々と入ったのです。

「休め　　」

と聲する。

私は雪籠りの許を受けようとして、たど／＼と近づきました、扉のしまつた中の様子を、硝子窓越しに、ふと見て茫然と立ちました。

真中の卓子を圍んで、入亂れつゝ椅子に掛けて、背囊も解かず、銃を引つけたまゝ、大皿に装つた、握飯、赤飯、煮染をてん／＼に取つて居ます。

頭を振り、足ぶみをするのなぞ見えますけれども、聲は籠つて聞えません。

「　　わあ　　」

と罵るか、笑ふか、一つ大聲が響いたと思ふと、あの長靴なのが、つか／＼と進んで、半月形の講壇に上つて、ツと身を一方に開くと、一人、眞すぐに進んで、正面の黒板へ白墨を手にして、何事をか記すのです、　　勿論、武装のまゝでありました。

何にも、黒板へ顯れません。

續いて一人、また同じ事をしました。

が、何にも黒板へ顯れません。

十六人が十六人、同じやうなことをした。最後に、肩と頭と一團に成つたと思ふと――其の隊長と思ふのが、衝と面を背けました時――苛つやうに、自棄のやうに、てん／＼に、一齊に白墨を投げました。雪が群つて散るやうです。

「氣をつけ。」

つゝと鷲が片翼を長く開いたやうに、壇をかけて列が整ふ。

「右向け、右――前へ！」

入口が背後にあるか、吸はるゝやうに消え

ました。

と思ふと、忽然として、顯れて、むくと躍つて、卓子の眞中へ高く乗つた。雪を拂へば咽喉白くして、茶の斑なる、畑將軍の宛然犬獅子

ウオゝゝゝ！

肩を聳て、前脚をスクと立てゝ、耳が其の圓天井へ届くかとして、嚇と大口を開けて、まがみは遠く黒板に呼吸を吐いた――

黒板は一面眞白な雪に變りました。

此の猛犬は、――土地ではまだ、深山にかくれて生きて居る事を信ぜられて居ます。――雪中行軍に擬して、中の河内を柳ヶ瀬へ抜けようとした冒険に、教授が二人、其中學生が十五人、無慙にも凍死をしたのでした。――七年前。――

雪難之碑は其の記念ださうであります。

――其の時、豫て校庭に養はれて、嚮導に立つた犬の、恥ぢて自ら殺したとも言ひ、然らずと言ふのが――こゝに顯れたのであります。

一行が遭難の日は、學校に例として、食饌を備へるさうです。丁度其の夜に當つたのです。が、同じ月、同じ夜の其の命日は、月が晴れても、附近の町は、宵から戸を閉ぢるさうです、眞白な十七人が縦横に町を通るからだと言ひます。――後で此を聞ききました。

私は眠るやうに、學校の廊下に倒れて居ました。

翌早朝、小使部屋の爐の焚火に救はれて蘇生つた
のであります。が、いづれにも、然も、中にも恐縮
をしましたのは、汽車の厄に逢つた一人として、驛
員、殊に驛長さんの御立會に成つた事でありました。

【完】